

日本植生史学会大会開催報告

平成14年11月16日(土)から17日(日)の2日間、福井県立恐竜博物館において日本植生史学会第17回大会・総会が開催された。16日に一般講演、17日にシンポジウムが終日行われた。大会実行委員として、寺田和雄(委員長)、矢部淳、半田久美子(兵庫県立人と自然の博物館)の3人が学会から任命され、大会準備および運営にあたった。

日本植生史学会について

日本植生史学会[会長:辻誠一郎氏(国立歴史民俗博物館)、学会番号10779(文部科学省交付)]は、植物化石・植物遺体にもとづいて過去の植生とその変化の歴史を明らかにし、過去・現在の環境変遷を知る「植生史研究」の発展と普及を図ることを目的とした学会である。単に植生変化の解明だけでなく、栽培や伝播など植物と人間との関わりなど植物に関わるあらゆる事象を対象とし、古生物学をはじめ、考古学、第四紀学、植物分類学、植物生態学、地理学、民俗学などの研究領域の会員が、現在約400名活動している。1986年に前身である植生史研究会が発足し、1996年に日本植生史学会に発展した。本学会では、大会・総会を年1回、談話会を年1回催し、学会誌「植生史研究」(年2回)を刊行している。

シンポジウム

『考古?生態?進化?総合科学としての植生史学を考える』と題し、シンポジウムが行われた。植生史学は、研究対象(花粉、種子や果実、葉、材)や、その扱い方も様々であるだけでなく、研究目的も多岐にわたっている。このため、それぞれの研究分野の成果や問題点が同じ土俵で議論されることがなかった。今回のシンポジウムでは、このような状況を鑑み、植生史学の中で大きな柱となっている考古学、生態学、民俗学、古植物学のそれぞれの立場から5つの話題提供をしていただいた。

まず、考古学の立場から、三方町の鳥浜貝塚について、網谷克彦氏(敦賀女子短期大学)に話題提供していただいた。鳥浜貝塚は、「考古学と植生史学」の出発点ともいべき遺跡であり、調査方法、層序の問題、記載や分析の方法、古地理・古環境の復元、人間の資源獲得や栽培植物の問題など、オーソドックスな植生史研究の基本的な要素が全てそろっていたことを述べられた。次に、植生史学の中で都市環境史というテーマとして、谷川章雄氏(早稲田大学)に江戸城外堀について話題提供していただいた。都市というのは、貝塚とはちがって人工的な環境のウエイトが高く、自然環境と人間という単純な図式では読み解くことが難しい点が指摘された。次に生態学の立場から、「木材研究と年輪年代学の新しい展開」と題し、木村勝彦氏(福島大学)に話題提供していただいた。ここでは、年輪年代学と同位体炭素年代測定の精度の向上で、年代論の進歩が

見いだされる可能性が指摘された。民俗学の立場からは、宮田昌彦氏(千葉県立中央博物館)に「海藻と海草の利用に関する民族植物学的研究」と題し、話題提供していただいた。奈良時代以降の文献に見られる海藻(かいそう)と海草(うみくさ)をあらわす言葉から、その利用や食文化、中国との関係について述べられ、伝播や食文化といった民俗学の視点で植生史を見る必要があることが指摘された。最後に古植物学の立場から、西田治文氏(中央大学)が、「被子植物の系統と進化研究の新展開」と題して、植生史学における古植物学や植物系統学の位置づけが述べられた。総合討論では、今回の話題提供の中にも、同じ現象や状況に対する言葉が分野ごとに違っている例などが挙げられ、整理し統一的認識をもつ必要があるとの指摘がなされた。さらに、科学にはそれぞれの課題を掘り下げようとする分析的手法に専念しつつも、科学の総合性の上に立脚しているということの認識が不可欠であり、関連する分野が連携を強化すべきであると改めて確認した。

一般講演

一般講演では、「生態、古生態と環境変動」「人と植物の関係史」「分類・系統と生物地理」の3つのテーマ別に発表者を募り、口頭発表12件、ポスター発表5件が行われた。口頭発表では、福井県敦賀市の中池見湿地でのボーリング調査から、花粉分析に基づいて明らかにされた更新世の森林変化に関する発表をはじめ、ブナの晩氷期の分布やチョウセンゴヨウの生態的役割などが発表された。特に「人と植物の関係史」のセッションでは、日本各地の様々な時代の遺跡調査から得られた森林の木材利用に関する研究が数多く発表された。ポスター発表では、第三紀から第四紀にかけての古植物学的な研究や日本のイチョウのDNA変異と地理的分布などが発表され、活発な議論が行われた。

広報活動

大会の開催を数ヶ月前より、考古学や植物学関係のホームページの掲示欄に広報を流すとともに、日本植物学会及び日本動物学会の広報誌である生物科学ニュースにシンポジウムなど情報を公開した。さらに、福井県及び近県の考古学や埋蔵文化財の関係機関に学会から広報を流し、参加を呼びかけた。また、福井県および勝山市の記者クラブを通して、県内に広報した。

今回の大会には、合計97名(学会員62名:非学会員35名)の参加があり、今までの大会の中では極めて多い参加者数となった。学会員以外にも福井県をはじめ近県の考古学や埋蔵文化財関係の方などが多数参加されたことが影響した。今回このように、盛況に大会を終えることができたことは、関係諸氏のご助力の賜物である。記して感謝の意を表する。

寺田和雄・矢部 淳(福井県立恐竜博物館)